

## 「家族が語る もうひとつのハンセン病史」

2019年12月13日（金）

（4人目）

ファティマ・アルヴェス（ポルトガル 第二世代）



ファティマ・アルヴェス氏

私はファティマ・アルヴェスといいます。今日は、私自身と、ポルトガルの私と似た境遇にあった子どもたちを代表してこの場に立っています。

これから、私が思うところをお話しします。ロビスコ・パイス

療養所の入口には親と子の像が立っていますが、この中で起きていたことは、この像とは逆のことでした。どんな理由があろうとも、親子は必ず引き離されたのです。子どもには父親の愛と母親の愛が必要です。けれども私や他の子どもたちの時代には、そうではなかった。両親の愛から引き離されることは、まるで世界が終わるようなものです。

私が生まれた病院は、療養所の入口から2キロ800メートルのところにあります。この道の左右には何もありませんでした。しかし奥には二つの施設があって、それは感染予防施設と乳児院です。乳児院は、療養所内の病院で生まれ、すぐに親と引き離された小さな子どもたちのためのもので、感染予防施設は、5歳以上の子どもが暮らす場所で、中には小学校もありました。内部に学校があったということは、つまり、外部の子どもと交流することはできないということです。鎖が張られ、療養所の許可なしに出たり入ったりすることは禁じられていました。

写真①は、感染予防施設の正面玄関です。黒服の婦人が院長です。私自身の話をしましょう。私も他の多くの子どもたちも同じ経験をしています。冬の時期のことです。停電が起きると、あの暖炉に火を入れるのです。そうすると、子どもたちはとにかく急いで食事をしなければなりません



写真① 感染予防施設の正面玄関

でした。暖炉の火が消えてしまった時に、まだお皿に食べ物が残っていた子は、食堂から部屋へ連れて行かれて、定規で叩かれました。私は七つの時、あまり強く叩かれたので、皮膚の色が変わってしまいました。

私が両親に会いに行くときには、親とはガラス越しに会うことになっていました。ガラスにはたくさん穴が空いているんですが、もう一枚のガラスの穴とは合わない位置でした。二枚のガラスがあって、その間の距離は1メートルです。私たちがこちらのガラスの穴に触って、親が向こうのガラスの穴に触っても、決して触れあうことはできませんでした。私には親がいるのに、顔を合わせても触れることすらできなかったのです。なぜでしょうか？

子どもの付き添いは、言ってみれば監視人です。というのも、子どもの世話をする資格も知識も何も持っていない人たちだったからです。親が子に会う必要があると療養院から連絡が来て、もしその子がいい子にしていって、幸運だったなら、車に乗せられて、面会に行く。その時に、面会室まで監視人が付いてくるのです。けれども、子どもが行儀良くしていなければ、親が面会したいと言ってきていても、院長は面会を許しませんでした。いい子にしていないと親とは会えませんでした。私は行儀が良くないとされることがよくあったの

で、なかなか親と会えなかった。たとえ会えてもガラス越しなのに。それに、私たちは小さな子どもで、小さな子どもというのはイタズラもするし、そんなに行儀良くなんかしていないものです。なのに、ちょっとしたことで罰を受けて、親に会うことができなくなりました。

監視人による体罰もありました。行儀が悪いと、シャワーの下に連れていかれるのです。これは中国の体罰だと……中国の人、ごめんなさい。シャワーから冷たい水滴が頭にぼとぼと落ちるようにして立たされるのです。もう一つの体罰は、バスタブを冷たい水で一杯にした中へ頭から漬けられるというものでした。体罰を受ける子の手脚を他の子たちが押さえるのです。息ができませんでした。頭が出た時には「はあっ」となって、死ぬかと思いました。

こんな体罰をなぜ与えたのでしょうか？ 理由は、私たち子どもが汚すから、でした。子どもはそれぞれ世話をされるべきものですが、私たちは一斉に完璧に物事をこなさなければなりません。自分の両親だったら、あんな体罰は与えなかっただろうと思います。そう言っても仮定にしか過ぎませんが。

療養所外へ、私たち感染防止施設の子どもたちが出かけ、ゆくこともありました。ふだん私たちは感染予防施設内で勉強することになっていたのですが、ある時、施設外の子どもたちと一緒に勉強する機会がありました。私は一年生でしたが、それまで一度も（親の）病気、ハンセン病が何なのかを教えてもらっていませんでした。すると、外の子たちが聞くのです。君たちだけで勉強してるの？ 親は？ ああ、親は病気なんだよね。何の？ ハンセン病。ハンセン病って何？ 知らない。誰も説明してくれないし。それでも、親が何か悪い病気を患っているのだということになった。感染予防施設の子は、患者の子どもだということになっていた。そして、感染予防施設内でも病気について尋ねることは一切禁止されていました。どうしてお父さんは一緒にいないの？ なぜ親と離れていなければならないの？ なぜ（会う時には）ガラスがあるの？ 誰も答えてくれませんでした。唯一返ってきたのは、あんたたちの親はハンセン

病という病気なんだよ、という答えだけでした。じゃあ、ハンセン病って何？ 誰も答えてくれません。ハンセン病という言葉自体、口にすることはできませんでした。私たちはただ親と引き離されて育ち、ハンセン病とは何だか知ることもなく、外の子どもたちからは親が悪い病気に罹っていると言われていたのです。

ロビスコ・パイスの療養所にはお祭りがありましたが、私たちの感染予防施設は2.8kmも離れていたんで、この祭りを見ることはできませんでした。私たちが知っていたのはクリスマスのお祝いだけです。クリスマスのお祝いは私たちにとって……私個人にとっては……本当のことを言うと、辛いのですが、クリスマスが好きだったことは一度もありません。楽しめるようになったのは、52歳になってからです。なぜなら、私たちが子どもの頃、クリスマスというのは、施設の職員や偉い先生方の子どもたちのためのものだったからです。あるいは、当の先生方や職員たちのためのものでした。公務員だった職員は全員プレゼントをもらっていました。私たち入所者の子は、他の人たちのためにお祝いをするためだけにそこにいる、たんなる道化でした。クリスマスの前になると、私たち子どもはサンタクロースにプレゼントをお願いする手紙を書かなければなりません。いい子にしていたら、ということで。あれが欲しい、これが欲しいというお願いです。でも、いざプレゼントを配る段になると、私たちの分はないことが多かったのです。パーティは私たちのためのものとされていたけれど、実際には医者や職員の子たちのためのお祝いでした。私たちはどんなプレゼントがいいか、考えることはできました。あれがいいな、これがいいな、と。私はピエロのお人形が欲しかった。なぜかは分かりません。でも、好きだったのです。でもその年、ある医者の子どもが私と同じピエロの人形を欲しがったのです。すると、プレゼントを配っていた職員が、そのピエロはこっちへ寄越しなさい、と言うのです。私が選んだのよ、これは私のよ。いや、でも誰それ先生のお子さんの分がない。だから、それを寄越しなさい。おまえの分はないよ、と言うのです。私と友だちの分はありませんでした。彼女も小さ

な黒人の人形が欲しがっていたのです。(黒人の、と言いましたが) ごめんなさい、私は人種差別主義者じゃありません。とにかく、小さな白人の人形や黒人の人形があって、友だちは黒人の人形を欲しがっていたのです。でも、私たち二人にはプレゼントはありませんでした。そこで重要だったのは私たち、病人の子どもではなく、職員の、役人の子どものでした。大事だったのは彼らであって、私たちは単なるお飾りに過ぎなかったのです。私たちはただ、外からやってくる人たちの目の前で、お祝いをそれらしくするために、そこにいただけでした。確かに、私は一度もお腹を空かせていたことはありません。寒さに耐えなければならなかったこともあります。でも、体罰とひどい叱責とを受けました。そして、このお祝い。だから私は、一度もクリスマスが好きだったことがあります。10月が来て、12月になると、私が生まれたのは1月ですが、本当に死にたくなった。この世から消えてしまいたくなりました。何のためにここにいるのだらうと思って。クリスマスのお祝いなのに、それは私たち入所者の子どものものではなかった。綺麗な服を着せられていたけれど、お祝いは他の人たち、役人の子たちのためのものだった。そして、私たちは忘れられていたのです。

私は、クリスマスというものが何なのか、あるカウンセリングを受けるまで知りませんでした。そのカウンセリングで私は、自分の抱えていた怒りを、心の痛みを外に出すことができました。両親がいて、プレゼントをくれているのに、そのプレゼントは私には届かないのです。クリスマスのお祝いは、私たちのためのものであるべきだったのに、実際には医者や職員の子のためのものでした。私たちはたんなる道化、そこでお芝居をしていただけでした。自分たち自身を騙していたのです。両親はあそこにて、私にプレゼントを贈ってくれているのに、それが私には届かないのです。クリスマスの贈り物なのに、他の人に行ってしまった。なぜでしょうか。生きている意味などないと思っていました。この世にいる意味なんかない、と。父はいない、母もいない、クリスマスですら他の人のためのお祝いだった。忘れてしまい

たい。10月から12月にかけて、死にたいと思って生きてきました。この世から消えてしまいたかったのです。そして1月にまた戻ってきたいと思っていました。自分の誕生日があるから。

私が9歳になった日の話をしましょう。その日、私は他の子たちみんなの前で、ナイフを使って食べることを許されました。その日は体罰はありませんでした。でも、後になって、その日にしたことを咎められ、体罰を受けました。お祝いは、どんなものでも、忘れてしまいたい。なかった方がよかったです。

療養所には、患者たちを見張るガードがいて、患者は絶対に逃げることはできませんでした。どんな理由であれ、逃亡した人はつかまりました。私の両親は結婚するために、2人で脱走したのです。どうやってできたのかは分かりません。療養所から逃れ、結婚できたのです。そして、戻ってきました。その後、療養所を脱走したために罰を受けました。外へ出ることは禁じられていましたから。患者の多くは捕まって……というか、ハンセン病だと診断されると、医師が通報して、患者は強制的に療養所に送られていました。だから、この療養所には北から南まで全国からの患者がいました。私の父は北部、母は中部の出身です。2人には5人の子が生まれました。でも思うのです。5人も何のために産んだのだらう、と。引き離されるために？ 生まれて育っても、ガラス越しにしか会えないのに。引き離されているのに。カーネーション革命があっても、引き離されていたのに。なぜ子どもなんかつくったのでしょうか？ 意味がないじゃないですか。

院長が、感染予防施設内のすべてを仕切っていました。施設内の学校も、施設内で行われる行事もすべて。聖体拝領の儀式も施設内で行われていました。もちろん、体罰もです。なぜ体罰が許されたのでしょうか？ なぜなら、誰もその存在を知らなかったからです。ロビスコ・パイス療養院が存在することは、国中が知っていました。でも、患者の子どもについては誰も知らなかった。療養所の入口から28キロも中へ入らないといけませんでした。森の中には2本の道が通っていました。どのみち、私たちの存在は知られていなかったの



ですから、2.8キロもの距離は必要なかったはず  
です。そして、この院長は、その誰も知らないとい  
う状況を利用して、私たちに体罰を与えていた  
のです。両親から尋ねられた時、私は体罰を受け  
たと告げました。あんなこと、こんなことをされ  
たと言いました。何度も外で寝させられたりした  
と。すると付いてきていた監視人が、お喋りだね  
え、と言うのです。親と会っているのですから話  
すでしょう？ でも、施設に戻ったら、どうなる  
か分かってるね、と言われました。施設に戻っ  
たら、待っていたのは体罰でした。私が父母に話し  
たからです。引き離されているだけでも辛いのに、  
何が起きているか伝えることもできなかったの  
です。いい子にしている子もたくさんいました。で  
も、私の怒りを想像してみてください。父母はい  
ても、一緒にはられません。本当のことを話すと  
体罰です。勉強する歳になると、労働に追いや  
られるのです。9歳になった時には、自分より小  
さな子たちの面倒を見ていました。9歳の子ども  
が、2人の子どもの責任を負っていたのです。で  
も、本来、その責任は院長が負うものです。監視  
人たちが世話するべきでした。私たちではありません。  
でも、私たちの生活はそんな風でした。大きくな  
たらなりたかったものもあったけど、そんなこと  
できるわけありません。小さな子の面倒を見な  
ければならなかったのですから。9歳の時には、こ  
こに1人、こっちに1人、小さな子を連れていま  
した。お風呂に入れることだけはなくてよかった  
のですが、それはバスタブが高すぎて、無理だっ  
たからです。そうでなければ、私の役目だったは  
ずです。

現在60をいくつか超えている女性は、最近に  
なってようやく父親の名を知ることができまし  
た。私が自分のファイルを手に入れたからです。  
彼女のファイルもあることが分かったからです。  
60をいくつか超えて、ようやく父親の名を知っ  
たのです。悲しいことです。今では両親ともこの  
世にいませんが、60何歳かになって、父親は確  
かにいたのだ、と知りました。本当に辛いこと  
です。彼女は、それまでヘリコプターをお父さん  
だと思っていた。ヘリコプターが飛んでいるの  
を見ると、ああ、あれが私のお父さんよ！ヘリコ

プター！ヘリコプターなの！と言っていた。でも、  
違いました。60何歳にもなって、ようやく父親の  
ことを知ったのです。

写真②は、ガラ休暇村の浜辺です。みんな満足  
そうです。ここでは私は幸せでした。施設内では  
許されなかった、自分であること、子どもである  
ことが許されたからです。……私は子どもであ  
ったことはありません。そうであることを許され  
ていなかったから。5歳の時には、普通ではあり  
えない責任を負わされていました。ベッドメイ  
キングや部屋のおまの掃除は、5歳の私の役目  
でした。おまは、小さな子が夜起きておしっこを  
しにトイレにいかなくてもいいように、ベッドの  
下に置かれているものです。5歳の頃は大人しか  
かったので、その役目を与えられたのです。5歳  
ですでに、そんな役目がありました。それから大  
きくなって、いつだったか聞いたことがありま  
した。どうして、自分たちの責任を他人に押し  
つけるのか、と。でも、これからはおまえの責  
任だと言うばかりでした。その最初の時が5歳  
でした。でも、休暇村に来た時は、なんの役目  
もありませんでした。ずっと遊んでいてもよか  
ったのです。好きなことができました。体罰が  
なかったからです。監視人はいましたが、私は  
ここでは幸せでした。

建物は、ロビスコ・パイスの施設だけでなく、  
色々なところの子どもが来て使っていました。  
当時は、ハンセン病だけでなく、結核（の療  
養院）もあったからです。そうした子どもたち  
は、毎年5月から6月まで、この海辺の休暇  
村へやって来ました。そこで出会ったどの子  
も、海辺がいいと



写真② ガラ休暇村の浜辺で

言っていました。どの子もみんな、ここでは幸せだと。私も、施設にいた年月で一番幸せだった時期は、この海辺で過ごした時期だと言えます。ですから、今日でも私は、冬になると……夏にはほとんど行きませんが、冬に海辺へ出かけるのが好きです。潮の香が、昔の良かった時のことを思い出させてくれるから。ここにいた時だけが、幸せな時でした。

ガラ休暇村には劇場もあり、歌ったり、歌のコンクールを開いたり、劇をやったりしました。みんな幸せでした。色々な施設から子どもが来ていたので、ダンスや劇のコンクールが行われたりしました。

休暇村の延長には浜辺があり、冬、あまり寒かった時には、ここへ来ました。感染予防施設になかったものは、ここにありました。もっとも、両親だけは、いずれにもいませんでしたが。でも、体罰がなかったので、私たちは幸せでした。子どもにとっては、親がいなくても、辛い体罰がないだけでよかったのです。ここで一緒に遊んで話をした子どもたちは、みんな同じことを言っていました。この海辺には私たちの自由と喜びがあったのです。私たちが、私たちらしくいられる場所でした。休暇村は、本当に子どもたちだけのためのものでした。私たちのような親と離れている子どもや、両親が貧しくて海辺に出かけたりできない子どもも来ていました。

ひとつ秘密をお話しましょう。私は一度もスカートが好きだったことはありません。休暇村では木登りをしょっちゅうしていたし、施設内にいた時は、小さい子の世話をしなければならないし、男の子が女の子にちょっかいを出してくるし。ズボンなら、そういう問題はありません。なので、浜辺へ行った時、スカートもワンピースも着ていなかったのも、男の子みたいだと言われました(数秒聴取不能)。それ以来、13歳の時以来、一度もスカートもワンピースも着たことはありません。穿くのは長ズボンか半ズボンだけです。

私には、兄と弟2人がいます。兄については、私と全く同じではないけれど似たストーリーがあります。カーネーション革命の後、私は叔父たちに預けられました。自分のところで面倒を見ると

申し出てくれたのです。ロビスコ・パイスの問題は……革命の後、子どもたちは両親に引き渡されることになったのですが、子どもを引き取りたがらない親がいたことでした。そもそもガラス越しでしか会ったことがない。長じては、愛情を注げるかどうか分からない、というのです。子どもは自分たちを受け入れてくれるだろうか？ 自分の子に、自分が小さかった時にもらっていたものを与えることはできるだろうか？

そこで、何が起きたか。兄は、こうなりました。兄は叔父たちのところへ行きました。そのうち、叔母の一人が兄を疑問視するようになった。兄は成長途中(思春期?)で、色々詰問されました。結局、里親たちは兄に馴染めなかったのです。兄は一時期、放っておかれました。叔父も叔母ももう兄を引き取りたくない。屋根の下で暮らせただけマシでした。友人夫妻が家に置いてくれたからです。でも、じゃあ、食べて行くにはどうするか。衣類の洗濯はどこでするのか。豆を一缶買ってきて、燃えさしの薪の上で暖めて缶から直接食べていました。衣類の洗濯はこの蛇口でもできる。そんな風に、ある時期、兄は一人で生きていたのです。叔父たちが、子どもを受け入れる準備ができていなかったからです。家に引き取りましょう！と言うのは美しい申し出です。でも、その後で詰問が来る。疑問が湧いてくる。兄に答えることができたでしょうか？ いいえ。じゃあ、離れていた方がいい。こんな状況があるのに、療養所や感染予防施設は、両親が子どもを引き取れるように、子どもたちが親元へ帰れるようにするための準備を何もしていませんでした。

私には、亡くなった友だちがたくさんいます。ただ死んだのではありません。自殺したのです。親が彼らを引き取る準備ができていなかったから。そして、子どもたち自身も準備ができていなかったから。生きるのは、本当に辛いことだった。存在を誰にも知られずに隅っこで暮らし、そことは全く違う世界を知ることになった。どれだけの困難があったか。誰もそれに対して準備などできてはいなかったのも、死んでしまった方が楽だったのです。そこで、どうなったか。生活の一部をともし、一緒に遊んだ仲間、一緒に木登りまで

した友だちが、消えていきました。療養所、国が、彼らに生きる術を教えずに世間に放り出したからです。行けるところへ行けとばかりに。豆でも食っていろ、とばかりに。

革命があって、じゃあ（療養所は）閉鎖だ、(子どもたちは)引き渡した。どこへでも行くがいい。それが、13歳だった私に起きたことです。両親のことは誰も何も言わなかった。両親は私を引き取れなかった。どこへでも勝手に行け、と。

私は、ある婦人のところへ行きました。住み込み女中として雇われることになった。でも、住み込み女中は嫌でした。私は倉庫が好きでした。車の修理や電気工事をして働きました。施設には、国の工事関係者が来ていました。彼らの仕事をずっと見ていたのです。ガラスを嵌めたり、配管工事をしたり、配電したりするのを。そこから自分の適職を見つけました。でも、台所仕事は辛かった。10歳の時、すでに料理を他の14歳の子に教えていました。でも、私が好きだったのは機械と電気。そして料理も。他の女の子が言っていました。いいじゃない、住み込み女中になればって。私は、ごめん、でも住み込み女中は奴隷と同じだよ、と答えた。『奴隷女イザウラ』というドラマがありました。ご存じない方もいるかと思いますが、鞭で殴られるのです。奴隷はたくさんです。でも、彼らは13歳の私を、ある婦人のもとへ引き渡した。何をするために？ 住み込み女中をして、裏庭の世話をして、店番をするために。でも、私にはそんなスキルはなかった。どうすればよかったのでしょうか？ 四則演算はできたし、お金というものがあることも知ってはいたけれど、それを使って生活する方法は知らなかった。時々、街角のお店に軽食を受け取りに行くことがありました。そこへ来る子どもたちに、私たちは知られていました。でも、その時も私たち施設の子は、パンと牛乳を受け取るだけだった。お金は必要なかったのです。だから、13歳で働きに出た時、私はお金のことを知らなかった。

その婦人の家へ住み込み女中として引き取られた時、私がお金のことを知らなかったので、彼女は「ちゃんと仕事できる人が欲しいのよ」と言いました。「子どもは要らない」と。その子どもは、

学校に通っているべきでした。そこで彼女は施設に連絡し、私を迎えに来させました。国の社会福祉サービスは「子どもの権利」ということを言いますが、子どもの権利などどこにあるのでしょうか？ 子どもの権利は、13歳の子どもを働かせるところにはありません！ 13歳は義務教育期です。そんな子どもを働かせるなんて、ありえない。それが私に起きたことです。私は4ヶ月働きました。最初の給金は消えました。まるで何もなかったかのように。婦人は私の労働に対して給金を払った後、子どもは仕事できないと言った。250エスクード。……100エスクード札2枚と、茶色のコイン1枚（50エスクード硬貨）だということは知っていました。そのお金は、社会福祉サービスによって没収されていました。私が住んでいるコインブラの町では、250エスクードあれば暮らしていけると言われていました。でも、私の場合は？ 給金が消えてしまっているのに！ 57歳になる今でも、最初のお給金は消えたままです。最初のお給金を私が見ることは一度もありませんでした。一度も。感染予防施設にいた頃、父がペンを贈ってくれたことがありました。母も私にプレゼントを贈ってくれていました。でも社会福祉サービスは、何でも持って行ってしまうのです。ハンセン病の親を持つ子どもには、親からのプレゼントでさえもらえなかった。クリスマスのプレゼントももらえなかった。なのに、親に対しては、(子に何を贈るかを?) 説得するようなことも、社会福祉サービスはやっていました。そして父が私に贈ってくれたペンについては……短い話です。兄の面倒を見ていた叔父にキスをしなさい、と父に言われたんです。私は嫌だった。叔父は髭を伸ばしていたから。でも、キスをしたらプレゼントをあげると言われたのです。何のプレゼント？ ああ、ペンだよ。分かった、プレゼントくれるんだったら、キスしてもいい。私は叔父にキスしたけど、ペンは彼らのところへ行ってしまう、叔父は今でも同じ髭を生やしています。

私はずっと両親と暮らせるよう闘いました。そしてずっと問うてきました。なぜ私たちはこんな人生を送らなければならなかったのか。行く先々で、私は両親に会いたい、彼らがどこにいるのか



知りたいのだと、言ってきました。私は偶然に産まれてきたわけじゃないでしょう。両親はどこにいるのか？すると、出し抜けに父からの知らせが届きました。私は6通手紙を書いたのですが、返信があったのは一度きりです。娘よ、革命が終わったら、おまえに会えるだろうと書いてあった。

その父からの知らせを受けとったのは1978年の4月22日でした。午後3時に手紙が来て、午前3時には父の葬儀に出なければならないと書いてありました。辛いことです。私にはもう父がいない。家族で暮らすことをずっと夢見てきて、父からの手紙をもらった時は本当に嬉しかった。でも、それと一緒に、父の死を知らされたのです。

母が登場するのは、それよりずっと後のことです。もう父は亡くなっていた。母も出し抜けに登場しました。ああ、私の子なのだねえ。そうだね。写真③は、母と初めて過ごしたクリスマスの時のものです。写真で分かるように、母の手指や足には病気がありました。母と私と兄が写っています。料理をしようとしているところです。でも、母のことも辛い話です。私にはもう父がいませんでした。母と会うことはできました。でも、その母には小さな子どもがいたのです。一番下の弟です。リスボンで暮らしています。母と会えてから、クリスマスのパーティをしようと、私たちは計画しました。で、一番下の弟は……、私は言いました「ねえ、母さん」……、父の死があったけれど、少なくとも母と会えると思うと、私は幸せでした。最低限の愛情に接することはできるだろうと思っ



写真③母と初めて過ごすクリスマス

ていましたから。一度も接したことなかった愛情に。だから、それを受けられなかった私は、憤慨しました。母は、私が想像していなかったことをしました。私は母に「ねえ、母さん、ジョアン……これが一番末の弟です……ジョアンはペドロとリスボン見物に行くよ」と言いました。私たちは母さんの家へ行って、料理をしよう、と。でも、そこへ向かっている間に、母はこう言った。「ファティマ、おまえの弟がまだ来ていないよ」。どの弟かと、私は聞きました。すると、ジョアンだということです。

感染予防施設にいる頃から何人も子がいたのに、ママと言えるようになる歳から自分の手元に置いていた子のことを心配するの？ 他の子のことは一度も気遣ったことがなかったのに？ ガラス越しにしか会えなかった子のことは。なのに、成長を近くで見えていた子だけを気にするの？ 逆じゃないの？ ガラス越しにしか会えなかった子どものことを気にするべきじゃないの？ でも、末弟はずっと小さかったので、私は運が悪かったんだ、もう父はいない。母は私のことを気に掛けない、腹が立つけれど、私は彼女を母として受け入れよう、と思ったのです。

私が最も必要としていたもの、最も欲しかったものを、母は与えてくれませんでした。幼い頃からずっと成長を間近に見てきた子と、18歳や20歳になっていきなり現れた子とでは、違うのです。でも、その違いはどこにあるんでしょう？ なぜ、私たちを両親から引き離したんですか！ なんのために！？ こんな仕打ちを受けるようになるために？ 私がこんなに母を必要としているのに、母は手元に置いていた子しか目に入れていない。まだ小さいから小さいから、と。歩き始めるかどうかの子。

でも、なぜ私たちは引き離されたのか？ あの感染予防施設の入口にある彫像は、母親と子どもたちの像なのに。子どもたちと引き離された母親の像ではないのに。私は母の愛情が欲しかった。でも、母は与えてくれませんでした。私がもう20歳だったから。もう母の愛には値しなかった。でも末弟はまだ小さかった。あの子は値したのです。

母はもう亡くなりましたが、母と過ごす5分間

はあたかも1年であるようでした。なぜなら、母を母として受け入れることが決してできなかったからです。私は受け入れました。自分の母親でしたから。でも、私が一番必要としていたものを、彼女は一度も与えてはくれませんでした。私は聞いたことがありました。「どうして私たちは引き離されたの？」と。どうして母さんは……父さんは、引き離されることを許したのか、と。感染予防施設ではなく、同じ家で一緒に暮らせなかったのか、と。でも、母は、引き離されていることを知りませんでした。私はずっと闘ってきました。13歳の時から今日まで。私のファイルは、国が、ロビスコ・パイスがずっと（開示を？）拒否してきたものです。でも、私は粘り強く闘って、ようやく手にすることができました。

私はサッカーが大好きです。サッカー・クラブ、ポルトのファンです。私が両親を探し求める闘いで、まだ何の返答も得られていなかった頃、まだ母の所在を知らなかった頃、私はまだ18歳でした。つまり、母と出会うのは、もう少し後になります。両親の所在が分からない、兄弟とも引き離されていた状態に対する怒りを、私はスポーツで発散していました。私には理解できません。なぜポルトガル政府は、カーネーション革命後に……子どもを収監する施設があって……なぜ5人兄弟をバラバラにできたのか。5人ですよ、3人ではなく。5人がみんなバラバラになるなら、なぜ母はこんなにたくさんの子を産んだのか。後から、あんなことになるのに。意味がないじゃないですか。私は養子に行くこともできたでしょうが、国がそれを許さなかったのです。父が教育すべきだったからです。（数語聴取不能）でも、国家の責任は？ 子どもは護られないのですか？ 子どもの権利は考慮されないのですか？ なぜ？ 権利がないのなら、なぜ私たちはここにいるのでしょうか。世界のどこにおいても、子どもの権利がすべて守られているわけではないことは、承知しています。なぜ私たちにはそれが必要か。ユニセフはなんのためにあるのでしょうか。テレビで注目を集めるためだけですか？ ユニセフはそんなためだけにあるわけではないでしょう。子どもたちは怒りの声を上げなければ。私は大人ですが、5歳の子どもに

立ち返り、声を上げます。なぜ、私たちにあんなことをしたのですか？ 逃げることはできない問いです。

今日お見せした白黒の写真はすべて感染予防施設のアフォンソ神父が提供してくださいました。神父のおかげで……ある時、私は神父と道端でばったり会ったのです。「ファティマ、君はこの人たちの娘かい？」「そうですよ」「お母さんの写真があるんだよ」。（これまでにお見せした）白黒の写真はすべて、神父のおかげで手に入ったものです。それをみなさんにお見せしました。

最後に、歌を歌います。この歌は、子どもたちは勉強する存在であって、労働の奴隷になるべきではないということを歌っています。世界のどこであっても！ ここでも、中国でも日本でもロシアでも。どこであれ、子どもは尊厳のある生活を与えられるべきです。最後に、一つだけ歌を歌います。これは私が通った学校の校歌でした。子どもは勉強すべきものであって、労働の奴隷にしてはならないと、お伝えするために。歌はこんな風です。「私たちのグループは一番明るい。今日若い私たちは未来の立派な大人。よく勉強して、何年か後には博士に。陽の光に歌いましょ、はいはい、おじいちゃん、おばあちゃんの笑顔に、はいはい、楽しく勉強しましょ、はいはい、未来は私たちに微笑んでる」。

私に言えるのは、あそこで過ごした期間を通して、私は博士になった人を一人も見なかったということです。なぜなら、国家が子どもたちの未来を盗んだから。そして、子どもたちを、まるでジャガイモのように扱ったからです。

最後に、この会を主催して下さったみなさんにお礼を申し上げたいと思います。ポルトガルから出ることはめったにありませんが、今回こちらへ来ることができました。そして、ここに出席されているすべての方々、私の話を聞いて下さった方々にお礼を申し上げます。私は心から伝えたい。怒りの声を聞いて下さい、この問題を考えてください、と。私がポルトガル政府に求めることは、過去に犯した重大な過ちに対して、自殺してしまった子どもたちに対して、父親・母親の愛を否定してきたことに対して、少なくとも謝罪をする



だけの尊厳を持っていてほしいということです。  
貧しかろうが、酔っ払いだろうが、関係ありません。私には父や母が必要だった。しかし、それは叶わなかった。これは私の怒りの叫びです。愚かしくも親から引き離されてしまったすべての子どもたちが、決して忘れられてしまうことのないように。ありがとうございました。

(翻訳：国安真奈)